

かごつま家族ねっと 第23号

発行月 令和6年4月
発行人 鹿児島県知的障害者施設家族会連合会
事務局 〒890-0032
鹿児島市西陵7丁目30番3号
川畑岩夫 宅
TEL・FAX 099-281-9548

令和5年度 鹿施連研修会大盛況 ～ 北九州市立大学 小賀久教授を招く～

令和5年度の鹿施連研修会が、令和5年11月20日(月)、鹿児島市小野1丁目の「ハートピアかごしま」において開催され、約100名の参加者と小賀久教授の講話に引き込まれた研修会でした。鹿児島市役所の障害福祉課長さんも出席してもらいました。

小賀久教授は、「社会福祉援助論, 障がい者福祉論」を専攻され、現在の研究テーマは「デンマークの地域生活支援」「障がい者・高齢者の権利擁護」等であり、2019年全施連が発行した「地域共生ホーム」の共著者です。小賀教授には「知的障がいのある人の障がいの特性を踏まえた、これからの住まいと暮らし」、副題として「障がいの重い人から軽い人まで」という講演をいただきました。

《小賀久教授の講演内容》

第1 “親の権利”を考える際に、熟考していただきたいこととして

①障がいがあるわが子が生まれたことの罪悪感、或いは責任感はないか。罪悪感、或るいは責任感を完全に捨て去り、出発点は、「わが子」のことだから、「わが子」のためだから」で始まっているけれども、取り組みの目標は「より良い“社会”のためだから」となることが重要です。

②どの家庭にも障がいのある人が生まれる可能性があります。民法第877条の解釈等

第2 親の権利について

①親であると同時に、一人の人間としての権利を考えましょう。

- ・自分らしく、自分の時間を自由に持ち、働く、子育てから離れる(子供からすれば、親から離れる)ことも考えましょう。
- ・苦難を喜びに変える取り組みをし、古い社会を価値ある社会へ変え、語り合い気持ちをわかちあえる仲間と過ごす喜びを見つけましょう。

第3 知的障がい者への理解と支援について

①日々の体験の積み重ねから学ぶ

- ・「わからない」「できない」を発達的に受け止め、「できること」「得意なことを大切に」広がりを持たせていく体験的な取り組みを。大切なことは見えないことの中にもあります。「できない」の中にある「できる(できつつある)」を探しましょう。探す力が支援者には求められています。言葉のキャッチボールができなくても、経験を積み重ねていくと分かることもあります。言葉だけでなく、内面からも分かります。

②SOSを発信できる人

- ・パニックは、SOSです。裸になる。服を着ない。肌に合うものを見つけ出し、服を作ってやる。シャワーを針のように感じる人もいます。しっかりと観察をしてみましょう。できないときはSOSを発信(私を助けて、支援して)しています。



- ・支援員さんの情報及び家族の情報を共有し、エネルギーへの使い方を間違わないようにしましょう。
- ・「安心できる」「楽しめる」「自信が持てる」関係当事者と他との関係性を豊かに広がる共感・共有できる関係への援助の転換を図りましょう。
- ・支援員さんも大切にされていれば、利用者も大切にされます。

などと話され、講演を終えていただきました。

また、小賀教授の話を押聴したアンケートの結果では、

①特に印象に残ったことで家族に求めること

- ・親の権利を考える際に、どこの家庭にも障がいのある人は生まれる。
- ・社会正義の立場に立ち、取り組みとして、より良い社会のためとなることが重要。
- ・利用者の問題行動、パニックは”SOS”の発信です。
- ・利用者への接し方として、良い点、良かったことを見つけ育てる。押しつけやダメ出しはしない。ゆっくりと丁寧に教えてあげることが重要です。

②職員や施設へ

- ・職員が幸せを感じる職場は、利用者にとっても良い生活環境で幸せにつながる職場です。行政への現場理解が不足していれば、現場へ足を運んでもらうことです。

③「地域共生ホーム」の本では、現行制度が変わらずとも施設の協力次第では可能となることを提案してあります。一方、「幸せをつむぐ障がい者支援」の本では、「地域共生ホーム」のさらに”先を見通す必要性”について、デンマークの事例を挙げて書かれています。

④参加者の意見として

- ・職員と家族とのコミュニケーションの機会を増やして欲しい。
- ・グループディスカッションで家族の体験談をもっと聞きたい。
- ・親亡き後の問題、成年後見人制度の具体的な事例を知りたい。

などでした。今後も会員の皆さま方の要望に応えるようなプログラムにしていきます。



令和5年度 家族並びに施設職員研修会盛況 ～ 2地区支部家族会から発表 ～

令和6年1月21日(日)令和5年度家族並びに施設職員研修会が、鹿児島市のサンロイヤルホテルで開催されました。会場を埋め尽くす180名余の参加者とプログラムの多彩なこともあり、たいへん盛り上がった研修会でした。

家族と施設職員との合同研修会の開催は、全国的にもあまり例を見ない研修会であることをお聴きする度に、このような機会を設けていただいている鹿児島県知的障害者福祉協会のみな様に感謝の気持ちで一杯になります。今後も開催されますので参加してください。

開会のことばの中で、福祉協会の水流純大会長からは、① この4年間、コロナウイルス感染に振り回された生活が昨年5月から感染法上5類に移行したものの利用者には制約もあり、不自由な生活を強いられている。② 研修会を4年ぶりにオープンして開催し、ピアニストの辻井伸行さんの母親、辻井いつ子さんを招き講演をお願いしてありますなどと話されました。この研修会は、家族会も共催として参加させていただいており、家族の思いの発表や家族会員と施設職員の方々との意見交換ができるなど、家族としての情報交換の場にもなっています。鹿施連の中村俊久会長からは、全施連の常任理事会及び理事会、鹿施連の研修会の様子等を報告をされました。

研修Ⅰの「家族として思うこと」では、「鹿児島市地区支部」の吾子の里家族会の平 昭子さんが、同施設の看護師として働きながらグループホームで暮らしているお子さまとの関係について、小学校への入学から養護学校への転校で「ホット」したこと。お互いの気持ちも分かり、覚悟もできた。親

が元気なうちということ各方面・施設に相談し、さまざまな学園を知りお願いした。現在は、グループホームで暮らしており安心していています。私のもとに生まれてきたと神様に感謝しています。笑いや驚きの未来が待っていますなどと話されました。

次に、「南薩摩地区支部」の**ハイビスカス保護者会**の**垂口政治さん**が、通所を利用されているお子さまと年間を通して野菜の栽培、収穫、販売のことについて、特に、オグラの収穫時期は早朝から働く、大きさは収穫ハサミの柄の長さで測る。オグラのトゲから肌を守るため、雨衣を着て仕事をします。ハイビスカス保護者会は、クリスマス会、餅つき大会等を開催し、利用者から笑顔をもらい、親として気の休まる時間ともなります。これからも仕事ができるように手助けをしていきたい。親も子ども元気が一番と思っていますなどと話されました。

それぞれ、お子様の誕生から現在までの歩みの報告があり、親として深く共感し、そして今後も頑張らねばと勇気付けられることでした。

研修Ⅱの「利用者本人と職員からのメッセージ」では、「共同生活支援事業所あいら」の利用者中尾渉さんは、グループホームから菓子製造会社で働いています。最初は、自宅から通っていたが、甘えがあり、遅刻をして迷惑をかけたのでグループホームに入り、行動を律したことで遅刻をしなくなった。人間関係で仕事を辞めようと母親に相談したところ、「逃げたらダメ」と言われた言葉が心に響き、頑張っています。小学生から水泳を始め、令和5年度は、国民体育大会に出場、銀・銅メダルを獲得しました。家族や職場のお陰様と感謝しています。今後は、全障パラに出場することが夢です。

支援員の吉原伸さんは、利用者の話を良く聞き、できたり、できないときもあるが、情報を共有することに心がけ、利用者の「夢や目標」のため、何か手伝いができたらと思い、しっかりと支援していきたい等と話されました。特に、親元を離れ生活している利用者や家族へ配慮してもらっていることが分かり、家族として安心し、心穏やかに清々しい気持ちになりました。

講演Ⅰでは、「明るく、楽しく、あきらめない生き方」として、ピアニストの辻井伸行さんの母親・辻井いつ子さんの講演がありました。

辻井いつ子さんは、「『親ばか力』で才能を引き出す法則」として、①子どもの可能性を信じ、良く観察し、才能の種を発見。②始めるのに「早すぎる」はない。③思いっきり褒め、抱きしめる。④ネガティブな言葉は使わず、ファン第1号になる。⑤ひらめいたら即行動。⑥本物に触れさせ、良い先生を見つける。⑦明るく、楽しく、あきらめないなどについて話されました。伸行さんが障がい者と分かり、CDをかけると機嫌が良く、足でリズムを取り、音楽の才能に気づかされた。おもちゃのピアノや本物のピアノを弾いたり、言葉を喋るより、指を動かすことを楽しみ、ピアノで遊んでいた。5歳のころには、いろいろな曲を弾けるようになりました。海外旅行の際、街かどにピアノが置いてあり、ポップス系の曲を弾いたら聴衆が集まり、拍手と声援で褒めてくれた。ピアノが光を与えてくれるのではないかと気付いた。それ以来、神様からのプレゼント、可能性は無限大、前例がなければ我が家が前例になれば良い。伸行にとって何が大事か、笑顔と障がい者家族に希望が与えられるような音楽活動をしてくれることを楽しみにしています。子供にも家族にも下を向いた一日より、上を向いた一日を送ってもらいたいですなどと話されました。

講演Ⅱでは、「親として思うことと障がい者の権利擁護」と題して、弁護士の上山正幸氏の講演がありました。上山弁護士さんも知的障がい者のお子さまがいらっしやいます。

「親として思うこと」として「障がい者の権利擁護」として、①施設内での虐待(施設側の問題、職員の側の要因) ②意思決定支援とはなんだろうか? ③障がいって何だろう?個人モデルと社会モデル ④人間関係の三角形(A興味, B目的, C自分)「良好な関係のもとで障がい者が暮らせること」。また、「こんなかわいそうな子たち」「預かって、雇ってもらえるだけでありがたいです」など、こういう言葉を親が言わないで済む社会が望まれていますと話されました。



鹿児島市地区支部において研修会開催 ～（社福）青鳥会・愛光園施設長 坂上 茂氏による講演など～

令和6年3月7日(木),鹿児島市のハートピアかごしま多目的ホールにおいて,愛光園施設長坂上 茂氏を招き,「**楽しくできるテクノロジーを使った支援**」をテーマに講演会を開催しました。坂上氏は,①「できないことをできるようにするテクノロジー」②私と支援技術(AT)との出会い③これまで製作した機器の紹介④改めて支援技術(AT)とは「できないことをできるようにするだけではない」などについて話され,開発された作品を紹介しながら利用者や職員からの要望を受け,「**利用者が楽しく機器を使い,笑顔があふれる環境**」をつくるのが大切です。特に,「紙飛行機を飛ばす機器」「じゃんけんする手」「的当てピンポン」などが利用者に喜ばれているとも話されました。また,コロナ感染症が5類に移行したことを考慮し,マスクを着用して,参加者による**グループディスカッション**を開催しました。5グループにより,日ごろの親の思いや施設や家族会での困りごとなどを話し合いました。90分の時間でしたが,親亡き後の利用者の生活はようになるのか,成年後見人制度の利用をどうするか,きょうだい会の設立はどうなのか。今後は,親や兄弟・姉妹にも参加してもらおう研修会を開催して欲しい等の意見もありました。ディスカッションには,鹿児島市・郡区選出の藤崎 剛県議,県知的障害者福祉協会水流純大会長,県手をつなぐ育成会の花木千鶴理事長,鹿児島県障害福祉課施設支援係員さんにも出席していただき,親の思いなどを伝えました。

大島地区支部において「ボッチャ」大会開催

令和5年6月25日,奄美市の市民交流センターにおいて,「障がい者の学びの教室」として『ボッチャ』大会を開催しました。ボッチャは,2021年の東京パラリンピックで正式種目として採用され,「障がい・年齢の有無を問わない運動を通じて仲間づくり」が図られます。当日は,2チームに分かれ,赤・青のボール(新聞紙を丸めた物)で真剣に勝敗を競い合いながら,仲間づくりの中に笑いもありながら楽しく,和やかに競技しました。次回開催に向けて,お互いに練習に頑張ることを約束しました。

石川県能登半島震災への義援金募集について

令和6年1月1日,石川県の能登半島において,大きな地震が発生し,知的障がい者が利用する施設及び利用者に対し,甚大な被害が発生しました。1月29日,全施連の常任理事会において,義援金を募ることが決まり,各家族会に「義援金」をお願いしたところ,3月25日現在,鹿施連では,1,034,603円の募金が集まり,全施連を通じて送金しました。ご協力ありがとうございます。今後も義援金の募集は続けてまいります。

編 集 後 記

今回は,各研修会,支部活動を中心に掲載しました。コロナ感染症も昨年5月から感染法上の5類に移行され,日常生活にも少しずつ元に戻りつつあります。未だコロナ感染症が終息はしていません。お互いに注意しながら諸対策を講じ活動をお願いします。